

#### 第IV部門 街並みの色とイメージ ～枚方市を対象に～

大阪工業大学工学部 学生員 ○山村 剛  
 大阪工業大学工学部 楠本 太郎  
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞

##### 1. はじめに

近年、高度経済成長に伴う急速な都市化が終息しつつある。それに伴い人々の価値観も成長から充実へと変化し、美しい都市景観を求めるといった社会の意識が高まってきた。これをうけて、平成16年に景観法が施行され、良好な景観形成に向けて国をあげて本格的に動き出しつつある。景観現象において、色彩は対象がもつ視覚属性であり、人々の感覚や感情に瞬時に大きな影響を与える。したがって、都市内に無秩序に多くの色を持ち込むと非常に煩雑な印象を与えることにつながる。しかも、色彩は個人の感性に依存する部分が多いため、音や大気などと比較すると数量的な規制基準が設けられにくく、扱いが難しいとされてきた。しかし、色彩に関わる規制や誘導を行う自治体も増えてきている。そこでは、事前の十分な計画検討とある種の判断基準が求められている。そのために、色彩環境の快適性を考えることは、都市環境の改善や特色ある街づくりにとって重要である。

##### 2. 研究の目的と方法

街並みが都市のイメージを決定づける場合が多いことから、街並み景観を対象とした。街並み景観では、街路に立ち並ぶ複数の建物の色彩調和や、建物を構成するエレメントにより地域性、連続性などが形成される。現在の日本では、まったく新しい街並みを最初から建設するという機会は少ない。そこで、古い街並みの中に新しい建物を建設する際に、周辺の建物とどのように調和させていくかという点が課題としてあげられる。その第一歩として本研究では、既存の街並み、なかでも伝統的な街並みに現存する建物の色彩実態を調査し、分析・把握することを目的としている。

その方法として、建物のエレメントを「屋根、外壁、格子」と定義し、街路に沿った建物ごとに色票を用いて HVC (Hue=色相 Value=明度 Chroma=彩度) 値を測色するとともに、それぞれの建物の撮影も行った。この現地調査で収集したデータの、HVCそれぞれの値を相関させ、散布図でグラフ化した。さらに、これらのデータを GIS (地理情報システム) 上に構築することで視覚的表現を試みている。

##### 3. 対象地域

本研究では、調査対象地域として枚方市を選定した(図-1)。枚方市は平成10年に「枚方市都市景観形成誘導指針」を策定した。この指針は街並みと色彩に重点をおいたものである。また地域の個性と魅力を発展させ、美しくうらおいのある建築計画を行うために、枚方市を6つの地域に区分し、それぞれの地域に対して景観形成のイメージや特性を示している。その中でも、とくに枚方宿地区は、現在でも歴史的建造物が点在する地区であり、平成14年に枚方市景観保全地区にも指定されている。また現在、枚方市により街並み環境整備事業が展開されており、毎年数件の修復・復元や新築が行われている。したがって、上記の目的を実現する場として好適であると考えた。

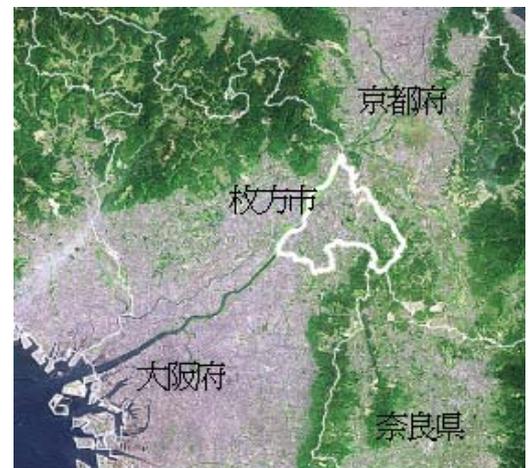


図-1 枚方市の位置図

#### 4. 現地調査

ある地域の色彩計画を考える際には、まず現地の建物の色を測った上で基調色を定めることが多い。また、現地での測色調査には、視観測色と物理的測色の2通りの方法がある。視観測色は色票を用いて、表記されている HVC 値を属性情報として調査用紙などに記入する方法であり、物理的測色は測色器や色差計を使用して色を測定し評価する方法である。しかし物理的測色は手が届く平滑な面の測定しかできないため現地調査には適さない。よって本研究の現地調査には、色票を用いた視観測色を選択した。また、測色する時間帯は観測面の照度を確保し、自然光の色度の影響に配慮するため、時間を制限して行った。対象地の選定で述べたように、まず6つの地域において調査を行った。調査方法として、指針を用いてそれぞれの地域のシンボルとなる街路の建物について測色を行い、それぞれの地域の特性を把握した。また、枚方宿においては、街道沿いの建物 226 軒の各エレメントを調査用紙にまとめ、外壁においては階層で異なる場合があるため、階層毎に HVC 値を取得した。

#### 5. GIS を用いた街並みの色彩分析

まず、Excel 上に現地調査により抽出した一軒毎の各エレメントに対する HVC 値をまとめた。その後、枚方宿における現況色彩の全体的傾向と特徴を定量的に分析するため、「色相- 明度」「色相- 彩度」「彩度- 明度」のように相関関係を示す散布図を作成した。図-2 は外壁について示したものであるが、色相に共通性が見られる。

本研究では、散布図のみでは把握できなかった建物の位置情報や、現況色彩を視覚的に分析するため、抽出した HVC 値とデジタルカメラの画像を GIS 上に展開し、データベースの構築を行った(図-3)。まず、建物データに、色の属性情報を対応させ、デジタルカメラで撮影した画像をリンクさせる手法(ホットリンク)を用いた。その上で、GIS 上に各エレメントの H、V、C それぞれの値をグラデーションで5つの階層に分類表現し、地域特性の把握を試みた。図-4 は外壁1階を色相で分類したものであるが、それぞれについて分析した結果、「屋根、格子」に関しては町家と現代建物に差異は少なく、全体として共通性が高いといえる。一方、「外壁」の明度は町屋周辺では低く、駅前周辺では高くなる傾向が示された。

#### 6. おわりに

上記の分析をもとに、枚方宿の基調色を抽出した(図-5)。町家は上段の色、現代建物には下段の色が抽出された。実際、現地調査を行った際に、街並みに連続性がないように感じられたが、今回の分析では連続性のある基調色が抽出された。このような感覚と分析結果のずれは、面積の大きいエレメントのみを対象として測色するという調査方法に起因していると考えられる。そこで今後の課題として、面積が小さくても人間の感性に影響を与えるエレメントについて考察し、分析方法を見直すことにより、景観の色彩調和における判断基準の提案へと展開を図りたいと考えている。

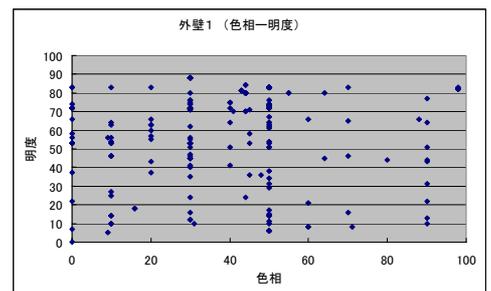


図-2 散布図



図-3 属性情報



図-4 グラデーションによる表現

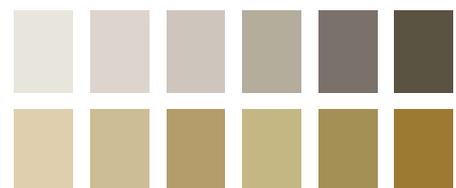


図-5 枚方宿の基調色

【参考文献】 飯島祥二編：都市景観環境と景観保全・形成政策、学校法人吉備学園岡山商科大学、2001